

No. 61

1983.

3. 1

岐阜の博物館

編集兼発行

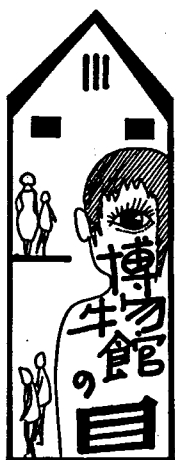
〒501-32 関市小屋名
(百年公園内)

岐阜県博物館内

岐阜県博物館協会

TEL (05752) 8-3111 (代)

振替 名古屋 6 37909

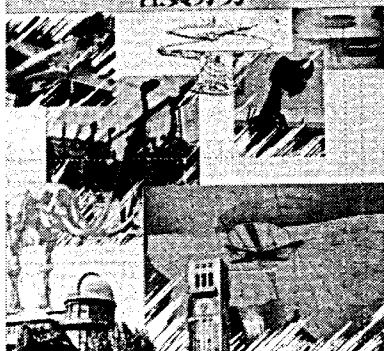


佐貫亦男著

科学博物館からの発想

学ぶ楽しさと見る喜び

佐貫亦男



科学博物館からの発想

佐貫亦男



「科学博物館からの発想」に学ぶ

実に楽しい本である。読み進んでいくと突然
〈発想その1. 展示は劇的でなければならぬ〉
そしてしばらくし、〈発想その2. 展示品は愛情をもって手入れし、常に清新に保たなければならぬ〉と続き、〈博物館の解説はその内容よりも参観者へ訴える努力が貴い〉〈真の博物館は生きている博物館、すなわち、展示物は活動すべきである〉〈博物館は愛好者の情報交換の場である〉〈博物館はその個性に応じて参観しないと意味がすくない〉〈科学博物館の最大使命は、身ぶるいするほどの刺激的な発想を誘発させることにある〉〈博物館では館員に質問すべきである。しろうとと専門家が接触する機会はこの以外にない〉などといった結語が、欧米の先進博物館見聞記の中に出てくる。発想その73まで、これだけを拾い出しても、ひとつひとつが、科学博物館のみならず、全ての博物館人なら心しなければならぬあじわい深い短文集となっている。そのうえ本書の結語として「日本人はなぜ博物館作りがへたか」とあり、(一)ド

ラマがないに始まり●説明資料、売店販売品が薄っぺらである●予算が足りないと逃げるな●道楽気がない●科学の歴史を尊重しよう●なん度きても飽きない展示をしよう●紙上博物館も重要であるなどなど、博物館人には耳痛い指摘が31項まで簡素にまとめられている。

「学ぶ楽しさと見る喜び」をサブテーマにしており、常設展示を前面に押し出している博物館学の書ともいえるものであるが、一般教養書として多くの読者層を対象にしている。それだけに、この書を通し、社会の人々が博物館に向ける目、また期待が、より高水準となることは確かであるだけに、博物館側こそおちおちのろのろしておれないといえる。本紙博物館の目で、しばしば指摘されることに共通することも当然多く、新しい博物館像、活動する博物館のあり方を求めて、学芸員の研修研摩が望まれる。のほほんとしていると、博物館側にいる人間よりも、外の人間集団の方にこそ、博物館学理論実践家が統々ウロウロする時代になりそうだ。(S.O)

岐阜県美術館

〒500 岐阜市字佐4-1-22

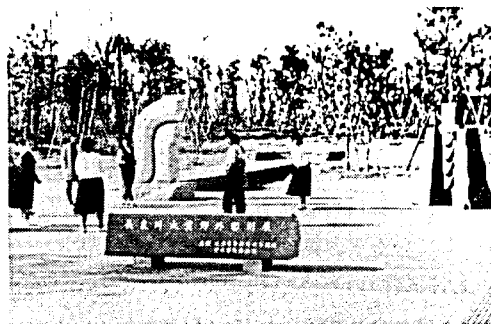
TEL 0582-71-1313 (代)

昭和50年1月の岐阜県美術館建設懇談会の発足に端を発し、8年ほどの準備期間を経て、岐阜県美術館は、昨年11月3日文化の日に華々しく開館しました。これまで、岐阜県民の中にもあまり知られていなかった郷土出身作家山本芳翠に焦点をあて、「明治15年・パリー 近代フランス絵画の展開と山本芳翠 — 」と題する開館記念特別展が催され(昭和57年11月3日～12月19日)大好評を博しました。

先に置県百年を記念して、関市小屋名、岐阜県百年公園内に設立され活動している総合博物館「岐阜県博物館」とともに、これでようやく岐阜県の文化の顔が、東西二大横綱とも揃い踏みで登場、県民のための文化創造活動の場が、これまで以上にいっそう充実したことになります。

ルドンの版画の意欲的な収集、本県にゆかりの作家である川合玉堂、前田青邨、熊谷守一等の名画の収集、ルノアールの「泉」彫刻マイヨールの「地中海」など、国内、国外の近代美術品の寄贈の数々、開館に至るまでも、芸術的価値の高い美術作品の収集・収蔵に際し、その都度マスコミで大きく報道され、開館は多くの

(屋外展示場：野外彫刻展の展示)



人々から熱望されていました。

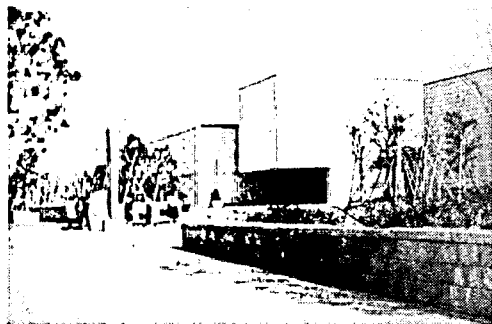
正面玄関口から入ると、右手一直線に広々とした美術館ホールがあります。左側に、常設展示室、企画展示室、講堂が設けられ、右側にロビーと一般展示室、多目的ホール、その背後に事務・管理系の諸室が設けられています。常設展示室は、洋画〈外国〉 洋画〈日本〉 日本画、版画彫刻、工芸などの部門で、年に4～5回の展示替えが計画されています。

企画展示室は、他館でいう特別展と同質のもの「83岐阜現況展(昭和58年1月15日～2月6日)」「坂井範一展(同4月28日～5月22日)」「幻想と造形(同7月20日～8月21日)」「前田青邨展(同10月9日～11月3日)」が企画されており、毎年4回程開催されます。

一般展示室は、いわば貸ギャラリー的な施設で、作家や作家集団の作品発表の場として、年間を通して多くの催し物が行われます。使用料は、1日につき、小5,000円、中10,000円、大15,000円、(料金を徴収する場合は、2倍の額)美術家集団の活発な利用が望まれます。

資料の収集、調査研究はもとより、その収蔵された「もの」という美術作品を、人間教育の教育素材として活用し、今後いかに博物館活動を実践し充実していくのか、大いに注目された期待されているといえます。観覧時間9時30分から17時まで(入館は16時30分まで)休館日月曜日(祝日の場合はその翌日)・祝日の翌日及び年末年始。常設展示室の観覧料は、一般200円、高・大生150円、小・中生100円、企画展はその都度別料金で観覧することになっています。

(建物のようす)

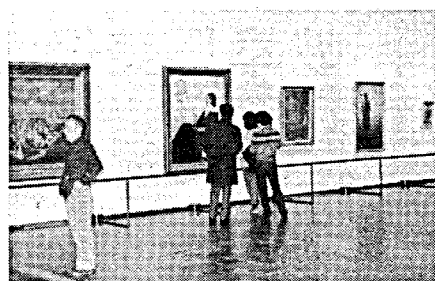




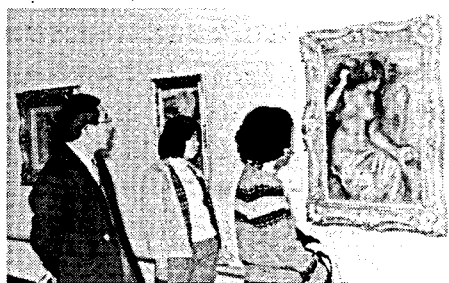
▲ 受付、案内のお嬢さん



▲ 絵はがき、図録、複製画等の販売コーナー



▲ 常設展示室 洋画〈日本〉のコーナー



◀ 目玉展示のひとつ
ルノアール「泉」

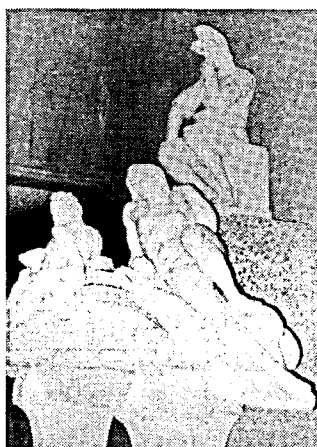


▼ 前田青邨「応永の武者」などがある日本画のコーナー

▼ ルドンの作品を中心としたコーナー



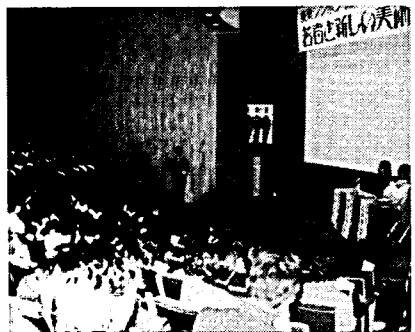
▶ 軽食喫茶室



▲ いろいろな催し物の会場となる多目的ホール



▼ 一流劇場並みの講堂



▼ 多目的ホールや実習室では、実技講座や美術講座等を開催



岐阜県美術館後援会のごあんない

美術館後援会事務局

これまでの経過

周知のように、岐阜県美術館は「美とふれあい、美と対話する」をキャッチフレーズに昭和57年11月3日、岐阜市宇佐4に誕生しました。岐阜県にかかわりの深い偉大な画家、玉堂、青邨、守一を中心とした明治以降の日本近代絵画、ルノアール、モロー、ミロなどの外国洋画、148点に及ぶルドン・コレクション、マイヨール等の彫刻は、質量ともに高い水準にあり、県内はもとより国内外からも関心が寄せられています。

現在、労働時間の短縮、週休二日制の普及など、余暇への文化の対応が迫られています。従って、社会教育機関としての美術館が、県民の審美の目を養い、地域の美術文化の発展に寄与することは当然の責務といえます。しかし陽の目を見ない作品が、そのままでは宝の持ち腐れであるように、多くの人々から遊離した美術館であっては、その存在価値がありません。そこで、数々の美術品の持つ豊かな美しさが、県民ひとりひとりに吸収され、生きた文化として花開くことを願って、昨年8月、設立発起人が中心となって岐阜県美術館後援会が誕生しました。

後援会は美術館を拠点として、美術の鑑賞、講演会、美術講座などを実施し、広く文化の発展に寄与するとともに、美術館の事業を側面から援助していくことにしています。会員は、美術愛好者で会費を納入して美術館からのサービスを受ける一般会員（会費年額3,000円）と、美術館をサポートすると同時にサービスを受ける特別会員（会費年額20,000円個人・法人とも）で構成されています。1月末現在で一般会員425名、特別会員259名、計684名で、法人を除く構成状況は、男359名女152名、男性は30歳代から50歳代が多く、女性は20歳代から40歳代が多く約70%を占めています。地域別では岐阜市在住が圧倒的に多く約65%、次いで羽島市、大垣市、各務原市で県外からも約5%あります。

会員の特典

一般会員……・常設展常時無料

- ・企画展各1回無料
- ・売店での割引
- ・後援会報及びニュース配布
- ・講演会など各種催し案内参加

特別会員……・常設展常時2名まで無料

- ・企画展各1回2名まで無料
- ・企画展ごと図録1部進呈
- ・売店での割引
- ・後援会報及びニュース配布
- ・講演会など各種催し案内招待

事業及び活動

スタートしてから日も浅く、事務局員も1名といった状態で、多くの事業は望めないが、来年度以降は充実させたいと願っています。今年度実施又は実施予定の事業は次の通りです。

◎作品鑑賞会：「明治15年・パリ」昭和57年

12月17日実施 約50名の会員参加

◎美術映画鑑賞会：「ルーブル美術館」「前田青邨の芸術」ほか 3回実施 参加多数

◎講演会：3月中旬実施予定。講演者、演題未定ですが平山郁夫氏が守屋多々志氏予定

◎コンサート：「莊村清志ギターの夕べ」

昭和58年3月18日 18時30分～ 入場無料

◎後援会報「あゆ」2月下旬発行予定

◎後援会ニュース随時発行

申込方法（問合せ）

申込書に会費を添え、一般会員に応募される方は写真も添えて、事務局へ直接持参または郵送して下さい。なお詳細については事務局までお問合せ下さい。（TEL 0582-71-1313）

まだ生れたばかりの美術館と後援会ですので、県民のみなさまの暖かいご支援とご協力をお願いします。おわりに貴重な紙面をお借りしましたことを厚くお礼申し上げます。

不 破 関 資 料 館

〒503-15 岐阜県不破郡関ヶ原町松尾

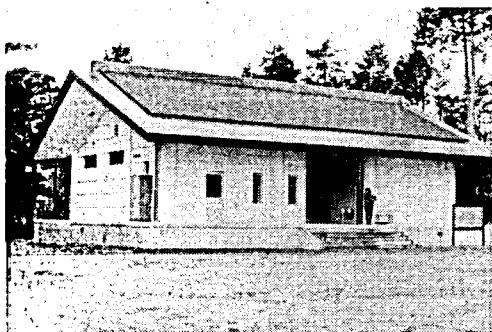
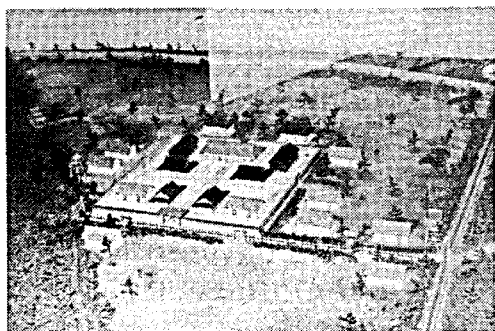
TEL <05844> 2-2611

奈良時代に設置され、その大きさと堅固さで名高かった不破関は、延暦8年に停廃され姿を消してしまいました。昭和49年から昭和52年にかけて、岐阜県教育委員会は、不破関跡発掘調査を行いました。和同開珎をはじめ軒丸瓦など貴重な資料が出土し、不破関の概要が明らかにされました。

こうした成果に基づき、資料の現地保存、公開展示と不破関跡保存のねらいをもって建設されたもので、史跡にうまくとけこんでおり、しっかりと落ち着いたムードの建物です。資料館前には広い駐車場があります。ここに車を止めて、周辺部一帯の「不破関跡見学コース」を一巡したいものです。不破関南限・東限・北限の各土塁跡、不破関庁舎跡、鍛冶工房跡、東城門跡、伝関守跡などがあります。

館内へ入ると、まず目に飛び込むのが「不破の関推定復元模型です。史跡を歩いてまわった体験とだぶらせてこそ、生きてくる展示品です。予備知識として、史跡めぐりの前に見ておくのもいいでしょう。館内の展示は「不破の関設置前の美濃」に始まり、位置、設置、機能、規模と構造と不破関を概説しています。他に、美濃の須恵器、不破関の停廃、中世の不破関、文学に表われた不破関などのコーナーがあります。

(不破関 推定復元の模型)



(建物の全景)

こじんまりとよくまとめられており洗練された展示となっています。先号で紹介した関ヶ原町歴史民俗資料館とあわせ、小さい町に2館が同時にオープンしたものです。他の市町村では考えられない歴史の町ならではの、充実した資料の保存・公開の場の整備に頭がさがります。

ただ心配されることは、こうした市町村単位の資料館が続々と誕生していますが、設置後に運営されるかです。これも先号で指摘したことです。せっかくの施設設備、すばらしい資料を有しながら、ややもすると死蔵する保存庫になりがちな点、どのように地域住民と結びつけた教育活動を展開していくのか、逆に利用する側も、ふるさとを知る自己学習の場として、こうした文化機関を、根強く下から盛り上げ支えていくか、官民一体となった模索の途上なのでしょう。休館日、月曜日、祝日の翌日、年末年始、開館時間4月～10月9時～16時30分、その他9時～16時、入館料大人100円 小中学生50円、(30人以上団体割引) 駐車場は無料です。

(展示ケース内のようす)



博物館活動に望むこと

岐阜市教育委員会 社会教育課長 鷲見 峯 男

博物館や美術館がここ数年来、経済不況の中で大型プロジェクトの一環として、次々と地方を中心に建設されている。これはこれで大変結構なことであるが問題があるのではないかな。

「物を造る」ということは、行政としては大変な仕事である。まして橋などと異なり、博物館や美術館の場合は「ヒト」がいなければならぬからである。特に最近の低成長時代の中で、国は勿論のことこの自治体もふところは苦しい状態である。しかし市民にアピールするにはもってこいの「物」であることも否めない。

博物館でものを申せば、通常の場合、準備室の段階では「造る」ことに重点がいき、その後の人員配置や経営となると手がつけれられていないのが現実である。これらのこととなると、先の見通しの立たないまま見切り発車し、開館を目指して進められてしまう。担当者や担当部局がいろいろ努力はするが、「予算がない」の一言で、財政当局に押し切られて、開館はしたがというようなケースになりがちである。これ等のことは本当は建設以前の問題であり、特に準備委員によき人材の確保如何によることが多い。粘り強く当局とツメル人、ツメられる人を考慮したかどうかということもあろう。この辺が勘案されていないと前述のようなことになる。こんな事例は今迄にも、県の内外を問わず見られたことである。

私共岐阜市においても、昭和60年秋にオープン予定の歴史博物館（仮称）の建設を進めているが、前車の轍を踏まぬよう準備室長以下、スタッフが日夜努力を重ねている次第である。前書きが長くなってしまったが、表題を与えられて困っているが、私の「たわごと」と思っているだけでいただければと以下思いつくまま述べてみたい。

美術館やまちの画廊では、主体的の展示の外、

主として「貸ギャラリー」として開放している。博物館でもこれができないものだろうか。博物館では、貸ギャラリー的発想は不可能なのか……。私は不可能とは思っていない。従来の博物館の構想やイメージが、ガンとなっているだけだと考えるが……………。

まず、「やる」ことを前提にして障害となるものをひとつひとつはずしていく……と考えたら。

また、市民参加による博物館の展示、

単なる「物」の展示だけでなく、つくる、創造することの流れも含めての総合展示＝お祭りの展示＝、つまり単に「みる博物館」から、「参加する博物館」へ。「静」から「動」へ。

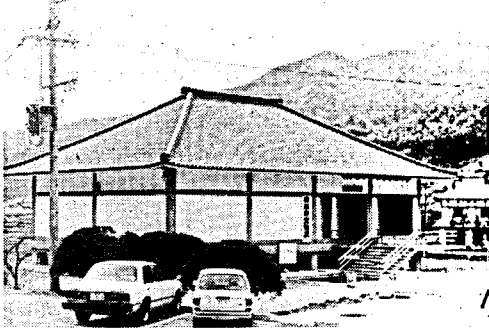
こんなことを考えてみたのは、従来博物館といえば、全体的に「暗い」、「閉ざされた」とか、何となく陰気くさいイメージしかないからである。これからの博物館は、老人から若者、子どもまで、気楽に出かけられ、参加でき楽しめるものでありたいと願うからである。

日本人の生活の中で余暇利用については、諸外国と比較をするとお世辞にも上手とはいえない。博物館の利用にもこのことが影響していると思われる節が見られるが、博物館としては、この点に鑑み、自分の館だけでなく、周辺の自然や他の施設との複合的利用をももつと図るべきで、この点も見過ごされておったり、或いは行政の壁（縦割り）に阻まれているが、これは当然破っていかなければならないと思う。普及活動の中でどう他館や周辺の施設、自然を取り入れ、協調していくかの課題も、可及的速かに取り上げていかなければならないのではないかな。

これからの新しい施策を博物館自体の中から生みだし、展開されることを切に望む者の1人の提言として一考をしていただければとの願いを汲みとっていただければ幸いに思う。

地方の歴史民族資料館に思うこと

萩原町教育委員会 社会教育主事 日下部 敏 雄



〔建設にあたって〕

萩原町では、郷土史の研究調査に欠くことのできない古文書、1万余点の収集を行いました。これらの文献、資料等は郷土史研究にかかせないものであり、同時に永久保存が必要とされる貴重な資料であって、収蔵庫、展示施設も考えなければならないようになってきました。

一方、飛騨の名利として有名な禅昌寺へも多くの人々が年々足を伸ばす傾向になってきております。けれども、県指定の名勝庭園と建造物を拝観するだけで、寺宝も展示場所がないため土蔵に眠っている現状で参観はできません。それに加え近年土蔵の老朽ははなはだしく、県・町指定文化財の保存も心配されていました。このため禅昌寺文化財保存会では、寺宝の収蔵・展示できる施設を建設する話が持ち上がり、町に対しその対応が要望されておりました。

そこで禅昌寺文化財保存会の要望を盛り込み、萩原町一円にわたる文化財の保存計画に加えて、禅昌寺に近い場所に建築するのが最も適切であるという結論に達し、7カ月の工事期間を経て昭和55年3月25日完成しました。

〔運営面あれこれ〕

最初に悩ませたのは、湿気がまだ十分ぬけ切っていない同年5月の連休からオープンしたため、カビが発生し始め、あわてて県の指導を受けたこと。除湿機をフル回転させたことがあります。

小さな町で、それも入館料をとって運営するときに、一年中同じものだけを並べておいてそれで済ますという訳にはいきません。町内、郡内にゆかりのあるものの特別展をこれから先も毎年一回ぐらい実施するつもりでおります。

56年の夏には、県教委と郡内町村の後援を得て、「南飛騨の円空仏展」を行い、郡内の円空仏156点を集めて観てもらいました。皆さん方ももう一度認識を持たれ、自分達の家庭の仏壇の中から10点ばかり新発見をしてくださいました。

57年春には、飛騨桜洞の文楽（人形浄瑠璃）展を開催しました。これは江戸中後期から明治中期まで続いた当町の文楽の資料が発見されたため、関係資料34点を紹介しました。岐阜県に残る文楽は、美濃国内の中山道沿いの村々にのみ存在するとされていましたが、七宗町葉津で文楽人形が発見されてから、飛騨街道にも分布することが明らかにされ、桜洞文楽の発見は飛騨国への伝播が確証され、評価を得ました。

同年秋になって「応挙と玄章展」。これは円山応挙の流れをくむ江戸後期に活躍した郷土三画人、武川維章（下呂町）、青木玄章（萩原町）、住芸文（小坂町）の作品50点余を展示し、郷土色を打ち出しました。

58年度もまだ公表できませんが、新しい催し物を練っているところです。

現在、禅昌寺の宝物を主体に約50点常時展示しています。

〔今後の課題〕

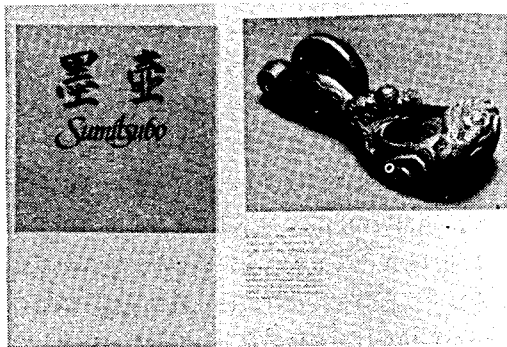
郷土でまだ陽の目を見ない資料の掘り起こし、その寄託。購入。資料館前庭の整備。観覧者の誘致など課題がいっぱいです。県下各市町村に、同じような規模・内容の資料館が続々誕生しています。今後どのように横のつながりを深め、地域に根づいた教育実践が累積できるか、種々雑多な課題が山積している新しい分野です。

〈文献紹介〉

墨壺

Sumitsubo

発行 集古資料館



〈すみつぼ〉〈すみいれ〉と言っても、今の小中学生では、どんな道具なのか知らないし見たこともない人がかなりあるかもしれません。春の野を飾る代表的な野草「スミレの花」のスミレは、花の形が「スマイレ」に似ていることから転じたものだよ……と説明しても、墨壺を見たことがなければ、ポカンとしているより仕方ありません。

大工さんが使っている墨壺こそは、木材を使用する上の基本の道具であるのに、今日軽視されがちです。木材業に従事し、「木の尊さ」を知れば知るほど「木材への感謝」を深め、会社の事務所に「集古資料館」を設立された「大飛木

材株式会社々長大塚佑二氏」は、忘れられ消えゆく木製の民具・道具の収集家としても知られています。

『一見つまらないと思われるものでも、堂々と盛大に集め、執念深くしかもこどもらしく、これでもかこれでもかと説明を加え、もういいかげんにしろといわれても、まだねばる性格こそ科学博物館志向である』とは、本紙1ページ博物館の目にある、科学博物館からの発想の著者佐貫亦男氏の「はじめに」の中の文句です。また、同書結語、日本の現状分析88項で、会社は博物館を持つべきである — 戦後躍進を重ねた日本の産業は、あまり博物館など作るつもりはないように見える。会社の幹部も、古い物など展示するより、新製品を考えるほうが先らしい。これでは世界の尊敬を受けない。— と指摘されています。しかし、みごとにそのことを実践され、ここにすばらしい収蔵資料の写真集を世に出されたのが大塚佑二氏です。なお写真集「墨壺」についての問合わせは

〒500 岐阜市神楽町39 集古資料館

TEL 0582-71-0228 (代)へ

≡ 県内ニュース ≡

小 池 和 輔 (元明方村村議、協会会員)

昭和58年1月19日、急性心筋コウソクのため死去、57歳。協会設立当初に、設立運営に尽力多大の貢献をされ、ことに昭和47年の東海地区博物館連絡協議会総会を、郡上郡明方村で開催した際、企画、財政的援助など積極的に協力され、昭和47年9月には、協会表彰を受賞されています。生前のご尽力に感謝し、ひたすらご冥福をお祈りいたします。

編集後記

◎本年度もどうにか4回発行できましたが、内容的に発展進歩しているのか……と自責の念にかられています。会員の皆様方からのご寄稿を重ねてお願いします。

◎県立総合博物館に県立の美術館が開館し、県下の博物館界も、公的な大規模館が一応完備、今後は、この中央博物館と県内各地の公私大小、種々雑多な館園とが、協会を仲立ちとして、有機的に結びつき、博物館としての使命を達成していく時代となりました。本紙も、その立場で発展を。(S.O)